りびんぐらいぶず 令和五年八月第一号

十六日講の話題から

◆ご讃題

十方諸有の衆生は
阿弥陀至徳の 御名をきき
真実信心 いたりなば
おほきに所聞を 慶喜せん

（『讃阿弥陀仏偈和讃』第二十五番、註釈版聖典 p569）

◆はじめに

七月十六日、正覚寺では、十年ぶりで滋賀組の報恩講に当る「十六日講」の会座を承りました。コロナ後に漸く開かれた尊い御法座です。早朝から役員の皆様方こぞってのご準備に支えられて無事お勤めさせて戴いたのです。

お客僧には、僧侶養成部で只今「布教専住職員」をお勤めの蒲生上組浄光寺ご新発意の藤澤彰祐布教使にご出講戴きました。当院総代長のお話では、今年五月、帰敬式（おかみそり）受式の際にお育てのお取次ぎに与ったとのことでした。滅多にないことは重なるものです。総代長ご自身の想い出を通して布教使様とのご縁を身近にお感じ戴いたことは、住職にとっての大きな歓びであります。お聴聞がご自身の人生に繋がり人生が豊かになるからです。

お勤めが終った後、奥の座敷でご法中様方へ「よろしければお聴聞のご縁にお遇い下さい」というものご案内をさしあげたところ、略全員の法中がお聴聞戴けました。お客僧は、本日は眼前にご法中様方がお並び下さり緊張致しますとおっしゃいました。当日は組のご法座であり、各寺院の総代様方が本堂にお参りだったからに違いないと思われました。皆共にご縁を戴くお聴聞のコミュニティの力強さを感じさせます。

◆唯除五逆誹謗正法（ゆいじょごぎゃくひほうしょうぼう）

唯除五逆誹謗正法」といふは、第十八願文に示された唯除の文です。銘文（Ref.注釈版聖典p644）に「唯除」といふはただ除くといふことばなり。五逆のつみびとをきらい誹謗のおもきことをしめして十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり」とあります。嘗て宗学院別科で○和上が解説なさり、「除く」とは「除かん」という如来様のお心を顕すと承ったことがあります。

註）五逆とは一般には小乗の五逆を挙げて示されます。①父を殺し、②母を殺し、③阿羅漢を殺し、④仏の身体を傷付けて出血させ、⑤教団の和合を破ることと言われます。誹謗正法とは、仏の教えをそしり正しい真理をないがしろにすることをいい、一般的には五逆罪よりも重い罪とされます（Ref.注釈版聖典、巻末註、浄土真宗辞典）。

五逆と正法を誹る罪を犯せば、救い主の如来様を否定することになる。それ故そのような大罪をおかせば、如来様のお救いに与る筈がない。だから予め「ただ除く」と示して十方一切の衆生にみな漏れずお救いに与かってくれるよう大罪のほどをお知らせ下さっているということになるのであります。「みなもれ

ずお救いに与るように」というのが如来様のお慈悲ですから 唯除の御文」でお知らせに与り如来様のお慈悲を頂戴するようにとのお心であります。

それでは 罪を犯した者」には、如来様のお慈悲はどのように働いて下さるのか、救いの対象に例外を設けない」のが如来様のお心ですから、除く」というのは 除かん」ということになるのだと了解するよりないのであります。言葉の論理を超えた所にお救いの働きの真の姿が読み取れます。

◆お客僧はどのようにご案内下さったか。

①その一つは、車で迎えてくれた母親と思わぬ親子げんかに見舞われて、母親は もう知らん」と云って、私を車から放り出した。けれども母親はどうしたかというと、自坊に向かって先に歩く我が子のあとから もう知らん、許せんけど放っておけない」と、後からゆるゆると車を運転してついてきてくれていたのでした。

これに対して、許せないからこそ放っておけない」のが如来様のお立場であるというのがお客僧のご指摘でした。皆漏れず掬い取りたい」お慈悲をお知らせ下さるお心だったからです。

②今一つは中陰のお参りに遅れた新発意のお話。謝罪してもなお身の置き場のない緊迫した雰囲気の中、その場に居合わせた総代長が信頼を損なった新発意に対して なんと言うことをしてくれたんや」とお叱り下さり罪の姿を知らされた。新発意が今一度謝罪して頭を上げると、その場の雰囲気は一変しており、不思議と身の置き場があると感じられた。罪を知らせて居場所を与える。それは如来様のお慈悲のなせる業であったのでありましょう。

◆顧みれば住職にも同様な出来事がなかったわけではありません。ご門徒様のご法事を承っていたのに前日夜前住がなくなり、朝を迎えても大わらわのその日ご門徒様のご法事の予定に注意が及ばなかったからであります。合掌。

後書き）お参りや御法話の準備については、近頃思うことが少なくありません。ただ単に教学上の構想だけを重ねていると、例えば、しばらくぶりで老人福祉施設に赴いた時に、感じ方の接点に共通点が見出せずとまどうことがあるからです。

お聴聞の皆様方との気持ちの接点をできる限り豊かに保つようにするにはどうすればよいか。只今は毎朝の鐘撞堂の鐘撞のあと、正月前に境内に落ちていたヒヨドリを葬ったお地蔵様の前で、ヒヨドリさんの名を呼び、昨年末から今日までお別れした人々を振り返り、如来様から賜ったお念仏を称え、聞こえて下さるお喚び声を改めて噛みしめる素朴極まりない一日を重ねているよりないのが住職の実情であります。

昨日聞くのも 今日また聞くも
ぜひにこいとの お喚び声。

六連島 むつれじま）のお軽さんのお歌であります。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会八月六日(日)十九時半～
◆歓喜会 八月十九日(土)午前十時、at正覚寺
◆仏婦例会は、歓喜会と近いので割愛します。

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)
〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166・FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥